

# 臨濟錄の成立に關する書誌學的考察 (其一)

今 津 洪 嶽

鎮州臨濟慧照禪師語錄一卷は、一に臨濟慧照玄公大宗師語錄と云ひ一般には臨濟錄の略名に依りて稱せられることは、雲門匡眞禪師廣錄三卷を雲門錄、趙州從諗禪師語錄三卷を趙州錄の略名に依りて呼ぶに同じい。古尊宿語錄第四並に四家語錄所收本を初め、普通現流の刊本に住三聖嗣法小師慧然集と撰號を按ずるに依りて、古來無批判に、臨濟大師の法嗣二十餘員中の上首鎮州三聖院の慧然禪師が輯録せられたものを、さながらに今日に至るまで傳えて居るものと信ぜられて居るが、併しこれには研究を必須とする幾多の問題を含んで居ることは、陸川堆雲居士が多年心血をそそがれた高著「臨濟及臨濟錄の研究」中に指摘せられた通りである、爾下この問題に關する私見の一端を披瀝して、敢へて博雅の大家の叱正を仰ぎたいと思ふ。

順序として現流本臨濟錄の由來するところを書誌學的に一瞥して置きたい。

本錄の序は、普通の現流本の馬防の序の外に、別に三序あり、總じて四序、それ等は現に大正新修大藏經第四十七卷諸宗部收錄の臨濟錄卷頭に收められ、元祿十一年に刊行された耕雲の臨濟錄摘要にも「此の錄凡そ前後四人之に序

す、一には此の馬防の序、二には大都報恩禪寺の林泉老人從倫禪師、元の貞元元貞の二年に之を序す、三には監察御史郭天錫、同大德二年に之に序す、四には五峰普秀齊休禪師齊休は齋戒沐浴を意味する齋沐の二に之に序す」と指摘して居る。

四序の中、馬防の序は、「宣和庚子中秋日」、即ち宋徽宗の宣和二年、我が鳥羽天皇の保安元年、臨濟滅後二百五十四年の作で、四序中最古のものである。序中に「圓覺老演今爲流通點檢將來故無差舛」と見へる語は、現流本の卷末に「住福州鼓山圓覺二菴宗演重開」と按ぜると合考すべき文字で、宗演は即ち本録の重開版者であり、雲門廣録の卷末に「住福州鼓山圓覺二宗演校勘」「板在福州鼓山王溢刊」王溢は宋初開版の開寶版即ち蜀本大藏經を九仙山・烏石山等に收納せる王審知の族なるべしと見へると同人で、機縁語句は五燈會元第十六、續傳燈錄第十八等に「元豐滿禪師法嗣福州雪峰宗演圓覺禪師、恩州人也」等と見へ、法脉は雲門文偃、香林澄遠、智門光祚、雪竇重顯、天衣義懷、天鉢重元、元豐清滿、雪峰宗演と次第し、鼓山、雪峰等に歴住した尊宿である。由來、福州を初め南支一帯の地は極めたる佛教有縁の地で、古來福州版又は閩版と稱せられたる東禪寺本及び開元寺本の大藏經は、並に福州の地で開板せられた私版で、各種の禪籍も盛んに刊行せられ雲臥紀談卷上には、南宋高宗の紹興中に、現流本と大差の無い臨濟錄をも含む古尊宿語錄二十二卷が刊行されたことが見へる。紹興四年正月に重刊した景德傳燈錄三十卷は、福州大中寺で知藏僧正が募縁再刊したもので、此年の三月には大慧禪師宗杲が雪峰山の菩提會に參ぜられた。傳法正宗記九卷、傳法正宗定祖圖一卷、傳法正宗論二卷も、孝宗の隆興二年十一月、福州開元寺大藏經に含めて開版せられた。臨濟錄が福州鼓山の宗演禪師に依りて開板せられたのも、決して偶然では無いであらう。

宗演禪師に依る臨濟錄は、普通の現流本臨濟錄には、明かに重開と記されて、初開本とは考へ難い、もつとも馬防の序中には、「圓覺老演今爲流通」と記されて重開たるや否やを明記し居らざること、祖錄の刊行の多くは宋代以後に屬して、唐代にはあまり無かつたらしく、入唐八家録を初め、南宋以前の禪籍の將來目錄中には、臨濟錄刊本の

將來せられた形跡は全く見へ無いことから推定して、宗演禪師の開版本を以て、或はこれが本録の初開即ち始刊本に非るかとも考へ得るが、又、暫くこれを北宋代佛典開版の史實に見るに、臨濟滅後一百五年即ち宋太祖の開寶四年、高品張從信に勅して成都に在りて大藏經板を雕造せしめ、太宗の太平興國八年成る、開元釋教目錄に依る五千四十八卷總して經版十三萬枚即ちこれで、蜀本大藏經の名を以て稱せられて居る、爾來各種の譯經はもとより、個人的撰著の刊行も次第に隆んに、例せば仁宗の嘉祐元年三月には、明教大師契嵩が六祖法寶壇經三卷を刊行し、英宗の治平元年四月には、自著傳法正宗記九卷外二部が刊刻されて居る、實に大師示寂に先んづこと九年前のことである。これを支那禪宗史特に臨濟門下の史實で考へると、その正脉とせられる興化存獎、南院慧顛、風穴延沼、首山省念、汾陽善昭、慈明楚圓と經て、慈明の下、楊岐方會と黃龍慧南の二徳を初め幾多の巨衲名匠を輩出するに至つた期間で、臨濟、雲門、滄仰、曹洞、法眼の五家の中、滄仰、法眼の兩宗は、日既に西山に傾き、雲門はその再來といはるゝ明覺大師雪竇重顯の出世せるあるも、兒孫これに伴はず、曹洞又宗勢次第に微に、臨濟獨り旭日東天の氣運を以て家風大に揚らんとするの時で、それは太祖の開寶六年八月汝州風穴山の延沼が「不幸臨濟之道、至吾將墜于地矣。觀此一衆、雖敏者多見性者少。吾雖望子之久、猶恐耽著此經、不能放捨」と、高く祖印を提けて祝福委囑した首山省念の嗣西河の師子汾州大中寺太子禪院の長老善昭に依りて高く揚げられた大旆のはためきとでも見られるであらう。

これ等の諸尊宿の機緣語句を傳へる諸語録と普通現流本の臨濟録との比較對校は、別に詳説することゝして、暫く汾陽無徳禪師語録三卷の内容と現流本臨濟録の内容とを對比すると、汾陽録中、臨濟の機緣又は語句は、三玄三要四照用四賓主、臨濟栽松、普化明暗頭打、普化喫生菜、普化見馬步使、臨濟兩堂首座相見の諸則が見へ、中に於て三玄三要の一則是、語録中隨處に見ることが出来る。これを時代を同じくせし雲門下の雪竇重顯の語録、即ち明覺禪師語録に檢すると、卷第二舉古の部に無位真人の話、臨濟侍立德山の則、卷第三の舉古の部に、臨濟示衆如蒿枝子拂相似

の話、臨濟與普化去施主家齋の則が見へ、別に洛浦久爲臨濟侍者の因縁が見へて、汾陽録が、普通の現流本臨濟録のそれに相當する因縁の取意的援用なるに對して、明覺録は所引の則の全文を擧げ、碧巖録に收むる頌古百則の中、第二十則の龍牙蒲團禪板の話、第三十二則の定上座佇立の話もこれに同じい。

明覺示寂の後約二十年、神宗の熙寧二年三月、我が後冷泉天皇の延久元年に示寂した黃龍慧南禪師語録を検するに、臨濟一劃、臨濟囑三聖の二話あり、楊岐方會禪師語録に、四料簡、四賓主の二則を見る。楊岐下に五祖法演禪師あり、語録卷上に四賓主、四料簡、四照用の三話、卷下に普化明暗頭の偈を擧するも、臨濟一劃、普化明暗頭の偈の外は、殆んど取意的援用にして全文を見ず。

南宋高宗の紹興五年八月、我が崇徳天皇の保延元年に示寂した圓悟佛果禪師語録を検すると、卷第二、第六、第九に見ゆる上堂法語に無位真人の話、第五、第十、第十五、第十七の上堂、法語、拈古等に四賓主、四照用の則を、第二、第七、第十五、第二十の上堂、法語、拈古等に三玄三要の則を、第七に收むる上堂に賓主歴然の則を、第十五の法語、第二十の拈古に臨濟遷化の因縁を、第十五の法語、第二十の偈頌の部に四料簡の則を擧揚するも、何れも取意的援用にして全文に非ず、たゞ第十三普說示衆に四喝（第十五の法語、第二十の偈頌にも四喝の則を用ゆ）第十七拈古の部に、普化臨濟施主家齋の話、兩堂首座齊下喝の話及び龍牙蒲團禪版の則を全文さながらに援用せられて居るその何れも普通の現流本臨濟録とは、字句を異にするもの多きことが注意せられる。

圓悟禪師と同代を同じくして、やゝ後れて紹興二十七年十月、我が後白河天皇の保元二年に示寂した、明州天童山の宏智正覺の廣録を検すると、廣録第二の頌古の部第十三則に臨濟遷化（從容録第一・臨濟瞎驢）第三十八則に臨濟真人（從第三・臨濟人境）第八十則に龍牙蒲團禪版（從第五・龍牙過板）第八十六則に佛法的々大意（從第六・臨濟大悟）第九十五則に臨濟糧食（從第六・臨濟一劃）の五則を、第三拈古の部に、第二十則の臨濟兩堂首座齊下喝、第三十四則に臨濟吹毛劍の話（從第六・臨濟一劃）の二則を、第四上堂の部に、定上座佇立の話、

第五小參の部に、三玄三要と賓主歷然の話を、第八偈頌の部に四賓主と四料簡の二則を題材として依用されて居り、別に無位真人、心法無形の二則を、第一の小參の部に援引されて居る。その何れも普通現流の臨濟録と著しくその字句を異にするともに、明覺録と圓悟録との兩錄所見の機縁語句の中、例せば臨濟與普化去施主家齋の因縁の如きは、全く字句を同じくして同一底本に依りしことを示して居り、明覺録と宏智録に共通する無位真人の話も又これに同じく、即ちこれに依りて雪竇、圓悟及び宏智所覽の臨濟録は、尠くとも同一系統に屬する臨濟録なりしことを推定し得られるやうに思はれるが、碧巖集第四の第三十二則の定上座佛法大意の話の評唱に依用する無位真人の話は、殆んど普通の現流本と字句を同じくすることが注意せられる。

こゝに注意すべきことは、無位真人の話に就てである。從容錄第三十八則臨濟真人の話の下林泉老人從倫の評唱に「師舉」として「臨濟廣語道、五蘊身田内、有無位真人、堂堂顯露、無絲髮許間隔 何不識取」と見へる。祖堂集第十九臨濟和尚の章に、「師有時謂衆云」として、「山僧分明向你道、五陰身田内、有無位真人、堂堂露現、無毫髮許間隔、何不識取、時有僧問、如何是無位真人、師便打之云、無位人是何塵不淨之物」と見へる前半と殆んど同一で、唯五蘊を五陰、絲髮を毫髮に作るのみの相違である。茲に「臨濟廣語」の語は、即ち「臨濟禪師の廣録」の意で雲門匡眞禪師廣録といふと同じ例であるが、林泉老人の當時、即ち元代の初世頃まで廣録が果して世に存して居たか否かは、極めて問題であり、寧ろ存して居なかつたと見るを史實とすべきであるが、老人は何等かに依つて、臨濟禪師に廣録の存して居たこと知つて居つたと解すべきであらう。それは兎に角として、廣録の存して居たことは、考察を進めるに従つて次第に證明されるであらう。祖堂集が從容錄に廣録に謂くとして傳へる無位真人の話を、その原形のまゝで傳へることは、恐くは祖堂集が編纂された南唐璟保大十年、即ち後周太祖の廣順二年、臨濟滅後八十餘年の頃には、廣録が未だ人間に存せしことを示すものであらう。臨濟章の結尾に、「自餘應機對荅廣彰別錄矣」といふ別録は、蓋しこの廣録を意味するものと考へられ、頗る注意すべき文字なるとともに、祖堂集臨濟傳の價值をして千鈞

の重味あらしめるものといふべく、臨濟研究の爲には最も尊重すべき史料として價值づけるものと思はれる。

轉じてこれを各種の傳燈錄、僧傳その他の所傳に就て考へて見ると、この場合に於て問題となるものは前項にも指摘した靜、筠の二上座に依りて共編せられ、泉州招慶寺主淨修禪師文僉即ち法を雪峰義存大師の神足漳州保福院の從展禪師に得た泉州招慶院の省僉淨修大師が序を撰した祖堂集と、東吳の道原の作に係る景德傳燈錄及び李遵勗の天聖廣燈錄並に贊寧の宋高僧傳及び明教大師契嵩の傳法正宗記の記載であるが、後の二書は其の性質上これを除いて可なりと考へられるから、即ち前三書に就て檢すれば充分である。この三者は、その何れも臨濟の機緣語句を傳ふるもの多く、特に天聖廣燈錄第十、第十一の兩卷には、その順序次第の上に多少の差違は存するが、その内容は殆んど萬曆板臨濟錄と同一であつて、然もその順次は普通の現流本臨濟錄と甚しく異にするものを存しつゝも、その内容に於ては、大體に於て殆んど大差無きの故を以て、それが比較對校は、暫く後にゆづることとし、今は唯時代の上よりの考察のみに止めて置きたい。祖堂集と傳燈錄とは、これを天聖廣燈錄に比較すると、傳燈錄としての本來の性質上機緣語句の重要なものゝみを擧げて、餘は總て省略せられて居るが、それにしても機緣語句は、相當に多く收載されて居る。

祖堂集は前項にも指摘したやうに一部隨處を通して「今唐保大十年王子歲」例せば卷二弘忍章、惠能章等といふに依りて、南唐璟保大十年即ち後周太祖の廣順二年、我が村上天皇の天曆六年、臨濟滅後八十六年後に成立せるものと推せられる。景德傳燈錄第十二、佛祖統記第四十二、佛祖歷代通載第二十四等の所傳と同じく、唐懿宗の咸通七年丙戌歲四月十日入滅説を採り、無位真人の話以下多くの機緣語句をあげ、結尾に「自餘應機對答廣彰別錄一矣」といふ。別錄は恐くは臨濟の廣錄を意味するなるべく、祖堂集一部二十卷を通して、二百五十三師の師承並に紀傳語句を傳ふる中、隨處

に「未<sub>レ</sub>親<sub>ニ</sub>行錄<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>決<sub>ニ</sub>化緣始終」。又は「未<sub>レ</sub>親<sub>ニ</sub>行錄<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>決<sub>ニ</sub>始終」。「未<sub>レ</sub>親<sub>ニ</sub>行狀<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>決<sub>ニ</sub>始終之要」と、その未だ語錄、行實等の信賴するに足る出典を披閱せざるものは、卒直にこれを明記せるの事實に徴して、臨濟章の機緣語句が信賴に價すべき確實なる資料に基いて執筆立傳せられたるものなることは疑ひなきことであらう。仔細に點檢するに、祖堂集の所傳は、無位真人の話を始め、その他の機緣因緣六節は、現流本臨濟錄所傳と、甚だしく文字語句を異にするのみに非ず、文辭古拙、特に行錄の部に相當する部分に於てその然るを見る。詳細は後に至りて比較對校して表示するであらう。普化和尙の紀傳及び行實は、祖堂集第十七に「未<sub>レ</sub>親<sub>ニ</sub>行錄<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>決<sub>ニ</sub>緣始終」として、機緣凡そ七節が收載されて居るが、又、現流本臨濟錄の所傳と異にするもの多く、殊にその遷化を傳ふる條に於て甚しい。祖堂集の成立した景保大十年は、宣和二年に先立つ百六十餘年前である。

道原の景德傳燈錄は、祖堂集成りて後五十二年、宋眞宗の景德元年、我が一條天皇の寛弘元年の成立で、編纂功成るや、即ち上表進獻し、帝は楊億、李維、王曙等に勅して、これを刊正して入藏頒行せしめられて居る。臨濟の行實紀傳並に機緣語句は卷第十二に見へるが、凡そ十四節より成り、更に卷第二十八には、諸方廣語の一節として、「鎮州臨濟義玄和尙語」として、普通の現流本臨濟錄所載の四料簡につぐ「今時學佛法者」云々の法語一篇が載せられて居る。全文は後者より短かく、字句に於て多少の出入があるが趣旨は大體に於て同じく聊か古拙の感を覺へるに過ぎない。暫く雪竇の示寂された仁宗の皇祐四年と、時代の前後を判ずると、傳燈錄の成立は約四十九年を遡り、先きに擧げた天聖廣燈錄との時代的關係は、廣燈錄は仁宗の天聖七年、我が後一條天皇の長元二年に上表進獻せられた禪宗廣燈錄に、天聖廣燈錄の名を賜つたものであるから、約三十年の先出である。傳燈錄と廣燈錄とを比較するに、後者が普通の現流本臨濟錄と著しく似同して機緣語句の順位次第の上に差異を存するのみなるに對して、傳燈錄の所傳は更にその差異の大なるものあり、従つて天聖廣燈錄と普通の現流本臨濟錄とは、親子の關係か、又は姉妹關係に在るものと考へ得る。

こゝに更に考ふべきは、宋代に願藏主の輯録した古尊宿語録卷第四に編入せられて居る臨濟録と元代に道泰の編纂した禪林類聚に収録されて居る臨濟關係の古則約二十則に就てある。

古尊宿語録は、南宋高宗の紹興元年、我が崇徳天皇の天承元年に初刊を見、十四年に再刊を見、度宗の咸淳三年五月、阿育王山廣利禪寺の物初大觀の序を附して重刻されて居る。雪堂刊本に先立つこと約一百七十年前である。普通現流の臨濟録とは、勘辨の下に於て稍やその則を尠なくするが、これを紹興五年に示寂した圓悟禪師の語録と比較すると、その相違は遙かに多い。この點に於て、圓悟禪師の當時に於て、既に別系統の臨濟録が行はれて居たことが推想せられる。

元の道泰の輯録した禪林類聚二十卷を検すると、卷第四の問法の部に定上座佇立の話一則。第六の示業の部に三支三要を初め外五則、第十の人境の部は、無位真人と四料簡の二則、肢体の部に、臨濟趙州洗脚の話一則。第十二の應化の部に、徳山普化木塔の因縁一則、第十三の遷化の部に、臨濟正法眼藏の話一則。第十六の法器の部に、普化明暗の話一則。槌拂の部に黃檗先師禪板拂子の話一則。第十七の刀劍の部に、臨濟吹毛劍の話一則。第十八の糧食の部に、臨濟難黃米の話一則。蔬菜の部に普化生菜の話一則。第十九の草木の部に、臨濟鋤茶園の話一則。以上總じて臨濟並に普化に關する機縁二十則を見ると、その何れも普通現流の臨濟録はもとより、天聖廣燈錄、並に古尊宿語録所收本とも、系統を異にした別の臨濟録を依用したものと思はれる。而してこの系統の臨濟録が、南宋度宗の咸淳五年十月我が龜山天皇の文永六年に示寂した虚堂智愚禪師の語録にも、依用されて居る事實から推定して、南宋度宗の當時流行されて居たと考へ得るとともに、元代の成立と云はれる禪林類聚の成立を考定する上にも、注意せらるべきことであらう。



臨濟録に四序を存する中、宣和二年に成る馬防の序を除く他の三序は、臨濟慧照玄公大宗師語録として刊行せられた雪堂禪師の刊本に加へられた序であつて、中に就き、五峰普秀の序は、製作年時を明記せざるを以て、年次を決定するは不可能であるが、林泉老人從倫の序は元成宗の元貞二年、郭天錫の序は、中間一年を隔て、大徳二年九月の作に係り、宗演重開本の出来た宣和二年に後るゝこと約一百八十年後の所出である。文意に徴するに、五峰普秀は、雪堂三世の法孫であるから、恐らくは、當時雪堂刊本を再刊、又は底本として新版が出来、それに製序したものであらう。

林泉老人從倫は、萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容菴録即ち從容録の著者、順天府報恩寺の萬松行秀の法嗣で、洞山良价禪師十六世の法孫である。始め萬壽寺に住し、元世宗の勅を奉じて、屢、内殿に對御して禪要を説き、至元十八年十月、聖旨に應じて、憫忠寺に於て老子道德經を除く餘の道藏經を燒毀した事蹟は、祥邁の辯僞録第七を初め、佛祖歷代通載第三、第三十三、四等と、續釋氏稽古略第一、五燈嚴統第十四等に見へて居る、從倫の序に依るに、臨濟祖師、正法眼を以て涅槃の心を明らかに、大智大慈を興し、大機大用を運らし、棒頭喝下、凡情を剿絶す。電掣し星馳す、卒に構副し難し、乃至、天下の英流仰瞻せざるは莫し、一宗の祖たること、理の當然なりと云い、次で雪堂の本録刊行に至る苦心を敘して、「今總統雪堂禪師、乃臨濟十八代孫、河北江南遍尋是録、偶至餘杭得獲是本、如貧得寶。似暗得燈。踊躍歡呼、不勝感激。遂捨長財、繡梓流通、俵施諸刹、此一端奇事、寔千載難逢」と述べて居る。宗演重開の後、僅に一百八十餘年にして、その刊本まさに人間を逸せんとす。雪堂禪師護法の悲願、眞に欽仰に堪へざるものがある。雪堂禪師は、北山居士郭天錫の序に「今雪堂大禪師、臨濟十八代嫡孫、琅琊第十世的派、王臣尊禮、縑素嚮慕」と見へ、禪師三世の法孫五峰普秀は、その序中に、禪師の法脉を詳説して、臨濟祖

師六傳して汾陽大宗師に至る。汾陽下に六大尊宿を出す。曰く慈明の圓、瑠璃の覺等なり、圓は楊岐の會に傳へ、會は白雲の端に傳へ、端は五祖の演に傳ふ。演は佛果の勤、佛鑑、天目の齊に傳ふ。佛果は虎丘の隆、大慧の杲に傳ふ。虎丘は應菴の華に傳へ、華は密菴の傑に傳へ、傑は松源の岳に傳へ、岳は無徳の通に傳へ、通は虚舟の度に傳へ、度は徑山虎巖の伏に傳ふ。天目の齊は汝州の和に傳へ、和は竹林の寶に傳へ、寶は竹林の安に傳へ、安は竹林の海に傳ふ。海は慶壽の璋、白澗の一、飯雲の宣に傳ふ。宣は平山の亮に傳ふ。白澗の一は冲虚の昉、懶牧の飯に傳ふ。慶壽の璋は海雲大宗師、竹林の舜に傳ふ。舜は龍華の惠に傳ふ。海雲は可菴の朗、龍宮の玉、願菴の價に傳ふ。可菴は太傅の劉文貞公、慶壽の滿に傳ふ。龍宮の玉は大名の海に傳ふ。願菴は慶壽の安に傳ふ。瑠璃の覺は潯潭の月に傳ふ。月は毘陵の眞に傳へ、眞は白水の白に傳へ、白は天寧の黨に傳へ、黨は慈照の純に傳へ、純は鄭州の寶に傳へ、寶は竹林の藏、慶壽の亨、少林の鑑に傳へ、慶壽の亨は東平の汴、大原の昭に傳ふ。少林の鑑は法王の通に傳へ、通は安閑の覺に傳ふ。覺は南京の智、西菴の贊に傳ふ。南京の智は壽峰の湛に傳へ、西菴の贊は雪堂の仁に傳ふ。雪堂は乃ち臨濟十八世の孫なり、門庭孤峻、機辯縱横ならざる莫し、俱に是れ克家子孫、燈々續焰直に如今に至る、謂つ可し源清うして流長しと、これこの謂なりと見へ、碧巖集の後序の中、元の仁宗の延祐四年、徑山の希陵虚谷の後序に、嶠中の張明遠居士が、偶ま寫本の碧巖集と、雪堂の刊本及び蜀本の碧巖集を得、訛舛を校訂して此の書を刊行し以て萬古に流通せしむと見へる雪堂禪師である。臨濟録を初め碧巖集その他の禪書の刊行に、幾多の行跡を残した尊宿なりと推せられる。

禪林實訓卷第三に「雪堂曰」として、學徒の服膺すべき箴言十六章が收められて居るが、恐くは同人なるべく、又、應菴疊華と因縁の深かつたことがわかる。

雪堂禪師の開版本は、林泉老人從倫は、「河北江南遍く是の録を尋ね、偶ま餘杭に至つて此の録を獲ることを得」と傳へ、一應は馬防の序を有する宗演の重開本を得たとも考へ得るが、又別に善寫の本を得たとも考へ得る。若し宗演重開本を更に新板流行したものとすれば、雪堂刊本にも當然馬防の序を附し、新に林泉老人と郭天錫の二序を加へて刊行、その後雪堂三世の孫五峰普秀の時、更に新に製序添加して即ち四序を附した臨濟録の刊行を見たとも推し得る。

が偶ま餘杭に至つて此録を獲ることを得た此録は、宗演重開本に非ずして善寫の本なりしとせば、恰も碧巖集の板行者張明遠が、偶ま善寫の本を獲て雪堂の刊本及び蜀本を以て訛舛を校訂して刊成するに至りし如しと考へられ、然る時は馬防の序は或は缺乏とも推せられる。大正新修大藏經諸宗部收録の臨濟録校訂に用いた諸本中、明本古尊宿語録所收本と宮内省圖書寮所藏本並に大谷大學所藏の慶安二年版には馬防の序を缺いて居ることは、雪堂刊本を底本とした理由に基くものではあるまいか。それにして更に別に問題がある。郭天錫の序に依ると、「毎に恨らむ。臨濟の一言一句、一棒一喝、參承語訣、升堂入室の語録、未だ大に發明せず、梓に刻して流行す」と序し、三世の孫五峰普秀の序中には、「茲に總統雪堂和尚、巴歌唱へて和するもの寡きを憫れみ、雪曲を弾じて應ずるもの稀れなるを嘆げく、語録文を缺き、叢林見ること罕れなり、遂に釋子に旁求して斯の文を再びす。板に鏤し以て廣く流通し、參玄をして受用を得せしめんと欲す。弘く祖道を揚げ、裕く後昆に垂る、棒頭喝下、須らく石火電光を明かにすべし。正案傍提、眉毛鼻孔を顧みることを要す。其の他の機緣備さに前録に載す。再舉するを勞せず」と敘する點に就てある。文意聊か明瞭を缺くものがあるが、或は雪堂刊本は、林泉老人の序に、「餘杭に至つて此録を獲ることを得た一本の臨濟録を得、それを中軸核心として、遍く釋子に旁求して新に資料を蒐集整理し、こゝに普通の現流本臨濟録に見るが如き臨濟録をなすに至りしものには非るか。

以上これを要約するに、凡そ臨濟大師の語録は、南宋環保大十年、臨濟滅後八十餘年、靜、筠の二上座に依りて祖堂集が編纂せられた當時は、臨濟大師の廣録が存し、それが林泉老人當時、即ち元代まで知られ居り、景德傳燈録はそれより脱化せしなるべきこと、それ等を母體として、宗演重開本と、雪竇、圓悟、宏智等所覽本と、天聖廣燈録並に萬曆版臨濟録系統の一本と、禪林類聚並に虛堂智愚禪師所覽の一本と、古尊宿語録並に四家語録所收本及び普通流通の臨濟録との尠くとも系統を異にした五種の略録云はゞ語要とでも稱すべきものを存し、考へやうに依つては、雪堂刊本は又別系統に屬し、臨濟慧照玄公大宗師語録と稱せしものゝ如く、若し然りとせば略録には、總じて六種の系

統あり、普通現流の臨濟録は、その中の一種かと考へられるといふに歸する。

なほこれに就て、現在我が國で普通一般に行はれて居る臨濟録の刊本に就て、一應の瞥見を與へて置くの必要を感ずる。それは其の流行の系統を明かにするの必要があるからである。

我が國への臨濟録の傳來は、何れの時代に何人に依りて初傳せられしやは、徵すべき何等の文獻をも有しないが、恐くは禪宗渡來の初期に於て、何人かに依りて早くも既に將來せられたことであらうと推せられる。聖一國師將來の經論章疏祖錄儒書等を錄載する東福寺祖塔常樂菴に襲藏する同寺第廿八世大道一以禪師應安三年二月示寂手澤の普門院經論章疏語錄儒書等目錄文和二年十月編を檢すると、各種の經論疏釋を初め、内外の典籍三百三十九部一千餘卷を錄載する中、禪

籍としては、景德傳燈錄一部三十冊を初め、廣燈、續燈、普燈、聯燈、五燈會元等の各種の傳燈錄より、雲寶明覺語黃龍四家語、宏智錄、石谿錄、圓悟錄等の諸尊宿の語錄數十部の多きを錄載するに係らず、臨濟録の錄載を缺くは注意さるべきことであらう。併し臨濟録が多少の差違を存するとは云へ、天聖廣燈錄一部三十冊中、第十、第十一の兩冊に收載されて居る事實より推して、これに依りて臨濟大師の行實行履や機緣語句が明らかめ得られたであらうことは、言を俟たざるところであらう。況んや各種の傳燈錄を初め、僧寶傳、佛法大明錄、大光明藏等の傳へらるゝあるに於てをやである。

我が國に於ける臨濟録の刊行は、後醍醐天皇の元應二年九月、妙秀に依りて刊行され、鏤板を東山建仁寺祥雲菴に施入せられたるを以て初刊とする。馬防の序一紙の外三十五紙あり、「佛祖正宗貴久流傳、因茲此錄板捨入祥雲菴、時元應庚申重陽日、小比丘妙秀」の刊記を有する。祥雲菴は開山相良永禪師至徳三年八月寂一山一寧國師の神足無著良緣和尚の法嗣である。一山國師は、元史第二十、一山國師は元史第二十、一山國師妙慈弘濟大師行業記等に徵すると。元の成

宗の大徳二年三月、大師の徽號を賜りて、江浙釋教の總統に任ぜられた。翌年三月、修好の詔書を齎して來朝、文保元年十月示寂、妙秀開版の元應二年は、國師の寂後四年目である。江浙釋教の總統に任じた大徳二年は、郭天錫が雪堂刊本の序を製した年であるから、國師がその初刊の一本を入手將來されたであらうことは容易に想像し得られると思ふ。併しこの理由を以て妙秀開版の臨濟錄は、雪堂本を覆刻したもの、又は底本としたものと速斷するは、恐らくは早計であらう。蓋しそれが林泉老人從倫及び郭天錫の序を有せざるのみに非ず、却つて馬防の序を有するからである。宣和二年の宗演重開の臨濟錄が、何人かに依りて將來せられ、それを覆刻又は底本としたものであらう。

ついで後醍醐天皇の嘉曆四年、比丘尼道證に依つて重刊を見る。此年八月改元を見、元徳元年と號したが、刊記には次の如く「仲秋日」と見へるから、八月十五日以前に出來たものであらう。刊記に「這箇冊子者、當年臨濟禪師、巧作白拈賊家具子也。今五百年後有兒孫比丘尼」。印開流通而證之者、且道、是直躬者邪、是不直躬者邪、具眼勝流垂鑑察焉。嘉曆己巳仲秋日、比丘尼道證謹識」とあり、道證比丘尼は、この前年即ち嘉曆三年の寒食日即ち冬至より一百三十日に當る日に比丘尼如淨が跋文を識した圓悟心要を開版した人で、即ち跋文に「道證大姉、佛果老人の心要を鏤す」の語が見へる、道證本は初刊の後五十六年目、後小松天皇の至徳元年、即ち後龜山天皇の元中元年に比丘可説に依りて、更に「金山侍香寮之公用、至徳元年閏九月十六日、可説置焉」の刊記を添へて重刊せられた。何れも馬防の序を安して、林泉老人、郭天錫及び五峰普秀の序を缺く、恐くは圓覺宗演に依る重開本の系統に屬する故であらう。後土御門天皇の延徳三年に季恭居士に依つて鏤板せられ濃州慧那郡の靈藥山正法寺の栖雲院に施入せられた一本も、宗演重開本に依りしものである。刊記に「延徳三年辛亥八月十五日、季恭居士、鏤梓捨入濃之正法栖雲院」と見へ、この版は「寛永十四年丁丑正月十日」に重開されて居る。林泉老人等の三序を有する雪堂刊本は、「永享九年八月十五日、板在法性寺東經所」の刊記を有する永享刊本を以て始見とする。永享は後花園天皇の御宇、「住福州鼓山圓覺苾芻宗演重開」の刊記を缺くは重視すべく、雪堂刊本を底本としたためであらう。

終りに萬曆版臨濟錄は、馬防の序を缺き、終始三十七紙、十行二十字詰本にして、「旰江一如居士左□□施贊鏤板、楚蘄唯心居士袁世振助刻、旰江彭池居士黃承試同校、萬曆丁未佛成道日金華洞天讖」と四行に作りて刊記あり、萬曆丁未は明神宗の萬曆三十五年にして、我が後陽成天皇の慶長十二年である。清朝に入り宣宗の道光二十二年重刊、卷頭扉裏に、「道光壬寅年清和月重刊」、卷頭扉裏に、「道光壬寅年清和月重刊、版存杭城昭慶寺大字經房」と題し、「板存杭省錢塘門外昭慶寺大字經房流通」の刊記が見へる。